

令和3年度
全国高等学校通信制教育研究会
研究協議会（東京大会）

第1分科会（「運営・教務」）

「生徒・保護者の思いに
寄り添うとりくみをめざして」

鹿児島県立開陽高等学校
教諭 一松 秀忠

1 はじめに

本校は、平成12(2000)年4月に定時制課程(普通科・オフィス情報科)・通信制課程(普通科・衛生看護科)の単位制高校として開校した。平成15(2003)年には全日制課程(普通科・福祉科)が設置され、3課程を併設する県内唯一の単位制高校として今年22年目を迎える。開陽高校設置の目的は、学習歴や生活環境、興味・関心など多様化した生徒に対応するため、弾力的な履修形態や前期・後期ごとの単位認定制度、入学選抜方法の工夫など、従来の教育形態、教育方法にとられない特色ある学校作りであった。入学してくる生徒は、3課程とも、中学校の新規卒業者だけでなく、高校中途退学者や転学者、小中学校時代に不登校の経験を持つ者、様々な課題を抱え、学習に困難を感じている生徒など、多く在籍している。

2 本校通信制課程の概要

(1) 設置学科

普通科

衛生看護科 技能連携校(肝付町立高山准看護学校)に在籍している者

(2) 募集定員 決められていない

(3) 入学者選抜方法

書類選考

年2回実施 前期(4月)、後期(10月) 新入学・転入学・編入学

(4) 生徒に関する事項

① 生徒数(令和3年5月1日現在)

普通科	衛生看護科	合計
1605	0	1605

② 協力校及び地区別生徒数(令和3年5月1日現在)

本校は県内唯一の公立通信制高校のため、生徒は県内各地にいて、地区ごとに14の協力校(県立高校)で学んでいる。スクーリングはそれぞれの協力校及び近隣の県立高校の先生方に面接指導をお願いしている。本校職員は、前後期の開講式を含め、年間4回(島しょ地区は開講式のみ2回)出張し、スクーリングや特別活動の指導を行っているが、どうしても地区の生徒とふれあう機会が少ないのが現状である。

鹿児島・始良(本校)	指宿	川辺	川内	出水	大口	志布志	鹿屋
893	47	62	121	98	30	47	169
種子島	屋久島	大島	喜界	徳之島	沖永良部	与論	
25	7	60	4	19	13	10	

③ 年齢別生徒数(令和3年5月1日現在)

年齢	15	16	17	18	19	20代	30代	40代	50代	60以上
人数	145	316	473	323	131	162	38	10	5	2
割合%	9.0	19.7	29.5	20.1	8.2	10.1	2.4	0.6	0.3	0.1
10代:1388(86.5%)										

④ 在籍者数及び入学者数の推移

開校当初からの数年間は2000人を超えていたが、中高生の生徒数減に伴って次第に減り、特に平成25年度からは1年間に平均100名を超えるほど大幅に減少していた。ところが、平成30年度から再び増加している(※資料1)。その背景には、他の高校からの転学が再び増加しているのに加え、中学校を卒業してすぐに入学する生徒が増えていることがあげられる(※資料2)。特に令和元年度は、新入学生における15歳の割合(中学卒業直後に入学した生徒)が8割を超えるほど増加した(※資料3)。高校進学をあきらめていた中学生が、進路選択の一つとして通信制高校を選ぶ例が少しずつ増えているのではないかと。

資料1 在籍者数の推移

年度	H25 (2013)	H26 (2014)	H27 (2015)	H28 (2016)	H29 (2017)	H30 (2018)	R1 (2019)	R2 (2020)
5月	1878	1743	1575	1452	1375	1417	1524	1621
10月	1887	1756	1587	1465	1419	1496	1600	1666

資料2 入学者数の推移

年度	H25 (2013)	H26 (2014)	H27 (2015)	H28 (2016)	H29 (2017)	H30 (2018)	R1 (2019)	R2 (2020)	
新入	前	203	186	165	164	153	177	212	217
	後	34	25	33	20	17	16	27	21
転入	前	221	187	172	171	152	207	241	231
	後	96	84	79	84	80	105	116	98
編入	前	80	67	54	46	56	44	46	50
	後	26	38	31	27	28	33	24	20
計	前	504	440	391	381	361	428	499	498
	後	156	147	143	131	125	154	167	139
合計	660	587	534	512	486	582	666	637	

資料3 4月新入生における15歳の割合

年度	H25 (2013)	H26 (2014)	H27 (2015)	H28 (2016)	H29 (2017)	H30 (2018)	R1 (2019)	R2 (2020)
15歳	128	111	103	111	101	125	173	161
4月入学生	203	186	165	164	153	177	212	217
%	63.1	59.7	62.4	67.7	66.0	70.6	81.6	74.2

⑤ 卒業者数の推移

年度	H25 (2013)	H26 (2014)	H27 (2015)	H28 (2016)	H29 (2017)	H30 (2018)	R1 (2019)	R2 (2020)
前	134	120	117	108	72	74	80	78
後	314	295	257	260	258	298	297	399
合計	448	415	374	368	330	372	377	477

3 入学生の状況から見えてくる本校生徒の実態

従来、通信制高校は経済的な理由などで、全日制高校に進学できなかった生徒が働きながら学ぶ場として大きな役割を担ってきたが、今日生徒の実態はかなり変化してきている。本校通信制課程も同じように、経済的な理由のほか、小中学校時の不登校や中途退学者、特別支援を必要とする生徒など、様々な課題を抱えた生徒が多く入学してくる。

「中学校ではほとんど学校に行けなくて、学力に不安があります。開陽通信での学習についていけるか心配です。」「レポートの内容は難しいのでしょうか。」「教室にどうしても入れないのですが、スクーリングはどのように行われているのでしょうか。」

毎年、本校通信制課程への新転編入学に関する問合せが多いが、この数年間の傾向として、中学生の保護者からの問合せが増えているように思える。その内容は学習に対する不安や特別支援に関するものがほとんどである。また、中学校からも、調査書の評定記入について「不登校であるため評定がつけられないがどうすればよいか。」といった問合せも多くなっている。この数年に新入学した生徒の調査書（中学卒業後5年以内の場合）からも、新入生の現状が見えてくる。

- ① 令和2年度の新入生では、中学校3年間で500日以上欠席、つまりほとんど学校に行くことができなかった生徒が1割近くいる。200日以上欠席まで含めると新入生の半分以上になる。しかも年々その割合が高くなっている。（※資料4）
- ② 評定がつけられない生徒が約1割。評定平均1.0の生徒を含めると半数になり、その割合も年々高くなっている。（※資料5）

資料4 中学校での欠席日数（4月新入学生調査書より）

	H29年度 (132人)		R1年度(206人)		R2年度 (204人)	
	人数	%	人数	%	人数	%
500以上	8	6.1	16	7.8	19	9.3
400~499	10	7.6	29	14.1	35	17.2
300~399	21	15.9	32	15.5	28	13.7
200~299	26	19.7	36	17.5	33	16.2
200日以上計	65	49.2	113	54.9	115	56.4
100~199	24	18.2	39	18.9	34	16.7
50~99	17	12.9	18	8.7	15	7.4
10~49	20	15.2	23	11.2	26	12.7
0~9	6	4.5	13	6.3	14	6.9

資料5 教科評定平均値（4月新入学生調査書より）

	H29年度 (133人)		R1年度(206人)		R2年度 (204人)	
	人数	%	人数	%	人数	%
なし	9	6.8	19	9.2	21	10.3
1.0	51	38.3	81	39.3	89	43.6
1.1~1.9	35	26.3	54	26.2	48	23.5
2.0~2.9	28	21.1	43	20.9	38	18.6
3.0~	10	7.5	9	4.4	8	3.9

このように、中学校時（生徒によっては小学校から）の不登校によって、学習することから疎外され、不安を感じている生徒が多く入学している。それらの生徒は本校入学後もスクーリングに出席できなかったり、レポート学習が進まなかったりして単位修得ができずにいることも少なくない。そして、次年度の受講登録をしないで不活動生（Dグループ）となり、「**次年度の受講登録を2年続けてしなかった場合除籍とする**」という学則にもとづき、そのまま退学していく生徒も多かった。他の高校で不登校となり転学してくる生徒のなかにも、同じように通信制の学習システムに慣れず、学習から遠ざかり、除籍となる場合も少なからずあった。

教務係として、以前からこのような生徒の状況を深刻に捉え、生徒が学習できる環境をどのように作るか、単位修得率・卒業率を高めるためには何が必要か、検討を重ねてきた。そして、何より生徒が学習することに喜びを抱き、開陽通信に入学して良かったと思い、誇りを持って卒業していくことを願いながら、他の係と連携し、全ての職員と協議・協力してさまざまとりくみをすすめてきた。

4 生徒が学習するために（具体的なとりくみ）

(1) 担任として

通信制は全日制と違って生徒と顔を合わせる機会がほとんどない。担任は生徒の学習を気にかけて、一人ひとり丁寧にかかわろうとしても、電話をしてもつながらない、スクーリングに来なければ会うこともできない、地区協力校の生徒であればなおさら直接会うことはまれである、という状況の中で、悩みながら必死でかかわっている。

本校通信制では、学校行事や学習に関すること、進路指導など、さまざまなことを生徒に連絡するために、年間10回機関誌『開陽通信』を発行している。通信制では、レポートを含め郵送での連絡が基本となるが、学校からの郵便物をすぐに確認しない生徒もいるので、担任は大切な事柄については電話で連絡している。特にレポートの提出期限が迫ってくると、電話で直接生徒へ語りかける場面が多くなる。一人ひとりのおかれている状況に配慮しながら、丁寧にかかわっている。それでも電話に出てくれない（でることができない）生徒もいて、日々思い悩んでいるのが現状である。

また、通信制課程の学習のシステムはなじみがないため、スクーリングの計画を立てることができない生徒も多く、担任が一人ひとりの時間割計画を作成することもある。特にAグループ（0～15単位）は新入生が多いので、担任は丁寧に説明している。

こうした各担任の一人ひとりの生徒に配慮し、その思いに寄り添ったかかわりが、最近の単位修得率の向上につながっている。また、今まで次年度の受講登録をせず不活動生（Dグループ）となる生徒はAグループに多かったが、その数もかなり減少している。その結果、Dグループの生徒数の割合はこの数年の間に低下した。

(2) 教科として

各教科においても、レポート作成や添削指導など、生徒の学習に対する不安に配慮した学習指導を行っている。特に理科・数学・英語においては、学校設定科目として「入門」講座を開設し、生徒の基礎学力の定着を図っている。

① 理科入門

理科の各科目を学習していく上で計算が必要であることから、小中学校の基礎的な計算力を定着させることを目的として、平成28年度から開設された。受講の制約を設けずに算数・数学の基礎的な計算を学習することができたため、多くの生徒が学習している。令和2年度から「数学入門」が設置され、その役割が引き継がれることになり、令和3年度で閉講する予定である。

② 数学入門

小中学校での不登校により、算数・数学の学習が困難である生徒も多いことから、小中学校の基礎

分野を学び直す科目として、令和2年度から開設した。受講については「数学Ⅰ」の履修・修得がない生徒に制限し、「数学Ⅰ」と同時受講はできないとした。令和2年度は、4月入学生のうち、155人が受講した。

③ 英語入門

数学と同じように、不登校のためにほとんど学習できていない生徒に配慮して、中学校の1年生から2年生程度の基礎的な文法を学ぶ科目として、令和2年度から開設した。受講については「コミュニケーション英語Ⅰ」の履修・修得がない生徒に制限し、「コミュニケーション英語Ⅰ」との同時受講はできないとした。令和2年度は、4月入学生のうち156人が受講した。

(3) 教育相談・特別支援教育係として

① 入学時の「配慮事項・支援等希望調査」

中学校や前籍の高校での不登校、発達障がいなどにより、学習活動や学校生活に困り感や不安感を抱いている生徒が多いため、平成27年度から入学生の保護者を対象に、「配慮事項・支援等希望調査」を実施した。希望があった家庭については、スクーリングが始まる前に担任や係で聞き取りをし、その内容を係で整理して、必要な配慮については職員間で情報を共有している。資料6にみられるように、年々相談の希望者数は増加しているが、それだけ学習活動や学校生活に不安を感じ、事前に相談しておきたいと考えている家庭が多いといえる。

資料6

年度	H27 (2015)	H28 (2016)	H29 (2017)	H30 (2018)	R1 (2019)	R2 (2020)
件数	26	34	29	58	69	38

② 開陽通信制教育相談

本校にもスクールカウンセラーが配置され、通信制の生徒・保護者も相談できる体制はできている。しかしながら、本校は3課程あり、相談件数が多いことで、通信制の生徒・保護者にとっては申し込みづらいのが現状だった。そこで、平成28年度からスクールカウンセラーによる教育相談とは別に、教育相談・特別支援教育係が実施する「開陽通信制教育相談」を行っている。生徒の約4割が地区協力校で学んでいるため、年に数回は係が出張して地区ごとの教育相談も実施している。令和元年度からは生徒数の多い大島地区でも実施するようになった。

資料7

年度	H28 (2016)	H29 (2017)	H30 (2018)	R1 (2019)	R2 (2020)
件数	13	38	50	49	46

③ 保護者「聞き合う会」

不登校や発達障がいなど、学習や学校生活に困難を感じている生徒の保護者も、悩みを多く抱えている。そのため、保護者同士がお互いに悩みや情報を交流し支え合えるような場として「聞き合う会」を平成28年度から実施している。当初、2人での開催ということもあったが回数を重ねるにつれ継続的に参加される保護者も増え、現在は5～10人の参加がある。

この4年間のとりくみで参加者も増え、定着してきた感がある。子育ての悩みや葛藤など保護者同

士で語り合うことで、共感したり新たな気づきを得られたりする場となっている。係職員も、親がどういう思いでいるのか、生徒・保護者とどのように関わっていけばよいかなど、考え、学ぶ機会となっている。

資料8

年度	H 2 8 (2016)	H 2 9 (2017)	H 3 0 (2018)	R 1 (2019)	R 2 (2020)
件数	1 5	1 4	3 9	8 4	3 7
実施回数	年3回	年3回	年7回	年10回	1 0回

(4) 教務係として

① ベーシックスタディ教室の開設

小中学校からの不登校が続いている生徒、特別支援を必要とする生徒、高校中退後何年も経過しているレポーターが解けるか心配だと相談する生徒等、学習に不安を抱いている多くの生徒の学習面での支援として、平成29年度からとりくんでいる。その目的を職員会議で次のように確認し、スタートした。

- | |
|---|
| (1) 学力に自信がない、学習のやり方がわからない等、学習することに困難を感じている生徒が、少しでも「学ぶ」ことの喜びを感じながら基礎学力を身につけてもらえるような学び直しの場としたい。 |
| (2) 今まで不登校であったため、スクーリングへ出席することに不安を感じている生徒が、学校に来て学習するきっかけとしたい。 |

学習内容は主に小中学校の「算数・数学」で、教材は学年ごとに自主作成し、それぞれの生徒に対応したものを使用している。実施回数は前後期それぞれ6回、水曜日の午後に2時間（現在は90分）行っている。申し込みは毎回20人前後、多いときで30人を超えることもあったが、実際の出席は毎回数名である。学習に不安を抱えている生徒や学校に来ることができない生徒が少しでも不安を和らげ学習できる環境をつくりたい、少しでも生徒とかかわる機会を作りたいと思い、始めたとりくみであるが、申し込んでも参加できない生徒の方が多いという現状である。一方で、この教室に参加したことがきっかけで、その後通常のスクーリングに出席することができるようになった生徒もいる。また、少ない実施回数や短い時間のために生徒一人ひとりに十分かかわることができないが、何気ない会話のなかで、生徒の複雑な思いにふれ、係職員が様々なことに気づかされることも多い。

入学してすぐに「ベーシックスタディ教室」に参加した一人の生徒の感想を紹介したい。中学時代はほとんど学校へ行くことができず、学習に不安を抱いたまま入学したが、2年後の現在は、生徒会役員としても充実した高校生活を送っている生徒である。4月の入学式での新入生歓迎のあいさつから抜粋したものである。

「当たり前もできない自分の体調面への心配と、これ以上学生としてのブランクを作りたくない焦りを天秤にかけ、とても悩んだあげく一歩踏み出すことに決めました。

ですがしばらく学習する環境から遠ざかっていた私は、レポートでの勉強にとっても不安を覚えていました。そんな時、学力への不安や基礎を学び直したいという生徒へ向け開かれているベーシックスタディ教室を知り、早速そこで数学をやり直し始めました。初めは、できない、分からないと先生に質問することすら怖かったのですが、優しく、丁寧に教えてくださったおかげで、質問することへの

恐怖心と数学をはじめとした勉強への苦手意識を克服することができました。それが自分の中で安心に変わり、そのころから体調も安定しはじめ、今では生徒会役員として学校にかかわることができています。」

今年3月卒業した生徒の卒業のことばも紹介したい。

私は以前、全日制の高校に通っていましたが、そこでの環境の変化などにより精神的ストレスを抱え、不登校を経験しました。1年近く学校に通えないまま、どうにかしたいという思いから開陽高校通信制に転学しました。しかし、そこでも学校に対する恐怖心から、さらに1年程通えない状況が続いていました。

そんな中、転機となったのはベーシックスタディ教室でのカウンセリングで出会った先生方でした。そこで、自分の不安や悩みを吐き出し、ようやく一歩を踏み出す勇気をもらいました。最初は通信制のシステムに戸惑いながらも、先生方のサポートのおかげで無事に学校生活を送ることができました。そして、学校に対して抱いていた恐怖心も、通信制での自由な校風から、いつしかほとんどなくなっていました。

...

自分と同じような境遇にいる人達が、安心して、自信を持って、この学校で過ごせることを願っています。

② 入学前の学校説明（個別相談）等のとりくみ

本校への入学を希望する生徒及び保護者からの問合せは電話だけでなく、来校して学校説明を受ける例も以前から多かった。入学前の面談が、本校での学習や学校生活への不安を和らげ、入学後の学習につなげることができるのではないかと考えて、係職員は常にそれぞれの生徒・保護者の思いに配慮しながら、丁寧に説明してきた。しかしながら、本校には島しょ地区を含め14の協力校があり、入学を希望する生徒も県内各地にいるが、交通手段等の理由から本校で学校説明を受けることができないという相談もあった。そこで、平成29年度から、島しょ地区を除く7地区の中学校へ案内し、本校通信制課程への入学を希望する生徒及び保護者を対象とした学校説明会（個別相談）を実施している。初年度は地区ごとの学校説明会について中学校の先生方にも十分伝わっていない面もあったが、とりくみを進めていく中で、次第に中学校の先生方や生徒・保護者に周知されるようになり、参加者が増加している。そして、参加者の多くはそのまま本校に入学している。さらに入学後も通信制の学習に対応して順調に学習し、単位修得している生徒の割合も年々高くなっている。（資料9）入学前の面談が、本校での学習にプラスに働いていると考えても良いのではないかと。

令和元年度からは大島地区でも2月に実施し、6人の参加があった。

資料9 地区別個別相談会に参加し、実際に開陽通信に入学した人数及び入学後の学習状況表

	H29(2017) 12月実施	H30(2018) 12月・2月実施	R1(2019) 12月・2月実施	R2(20) 12月・2月実施
参加者数(組)	17	34	64	66
入学者数	14	25	40	47
学習良好者数	9	18	31	41
割合%	64.3	72.0	77.5	87.2

参加した保護者からは次のような感想をいただいている。

「中学校時代、不登校だった。通信制のことがわからずに全日制か通信制で迷っていた。中学校の先生方もわからない様子だった。個別相談会に参加していろいろわかりやすく説明していただき、理解できた。母のみの参加だったので、家で娘に通信制のことを説明し、通信制への進学を決めた。迷っていた娘が決心するきっかけになった。不安が解消されて安心して入学することができ、その後の学習がスムーズに進められた。協力校でスクーリングが受けられることや、水曜スクーリングのことなども聴くことができ安心できた。

通信制というものがなかなかわからないので、個別相談会はなかなか本校に行くことができない地方の中学生にとってはありがたいと思う。」

「通信制について、知らないことを聞いたことが、親子ともども良かったと感じました。

通信制についての情報がバラバラで、正確なイメージができなかったが、説明を聞くことで具体的なイメージができ、安心することができた。

通信制高校に対するイメージは、説明を聞く前はあまり良くなかったが、説明を聞くことで良くなった。

自分の夢について、どのような道路をすすめばよいかもイメージできた。

対応して下さった先生がとても良い方で、安心して面談を受けることができた。」

「一般的なイメージとして『通信制の学習は簡単だ』と思われるようだが、実際やってみるとかなり苦勞している。何とか単位修得ができて良かった。そのことを周りの親にも伝えていこうと思っています。」

③ 入学相談係の新設

平成29年度からとりくんでいる地区別学校説明会（個別相談）は、年々申込者数が増加している。（資料9）特に令和元年度は急増したため、出張者数や相談会場を急遽増やすなどして対応した。また、学校説明のための来校者も毎年多く、時期によっては数名の来校者がいる日もある。（資料10）電話での問い合わせも年間数百件を超える。中学生や転学を考えている高校生とその保護者及び編入学を考えている生徒の開陽高校通信制への関心がますます高まっている。こうしたことから、学校説明会（個別相談）の実実施計画や本校での学校説明の調整・実施について、内容をより充実させながら効率よく企画・調整していくためにも新しい係が必要であると考え、令和2年度から校務分掌に「入学相談係」を設置した。入学前の相談が本校入学後に安心して学習や学校生活を送るきっかけになっていることから、今後、教務係をはじめ他の係と連携して「入学相談係」をより充実させていくことが求められる。

資料10 校内での学校説明

	H29 (2017) 9～3月	H30 (2018)	R1 (2019)	R2 (2020)
参加者数(組)	35	122	93	117

5 生徒の学習面における変化とその要因

(1) 単位修得率及び不活動生・除籍者数の変化

単位修得率は、後期では前期卒業生や卒業条件を満たした生徒が学習しないため、どうしても前期とくらべて低くなる傾向があるものの、この数年の間に上昇してきている。（資料11）また、受講登録し

なかったいわゆる不活動生（Dグループ）及び除籍者数の割合も年々減少している。（資料12）単位修得率の上昇は、不活動生や除籍者数の減少につながり、卒業率の上昇にも関係している。

資料11 単位修得率の変化

年度	H25 (2013)	H26 (2014)	H27 (2015)	H28 (2016)	H29 (2017)	H30 (2018)	R1 (2019)	R2 (2020)
前期	59.5	59.0	60.7	62.8	59.7	64.2	67.3	72.7
後期	51.6	51.2	52.9	56.4	59.5	58.7	59.4	64.2
年間	55.4	55.0	56.7	59.5	59.6	61.3	63.2	68.4

資料12 除籍者数の変化

年度	H25 (2013)	H26 (2014)	H27 (2015)	H28 (2016)	H29 (2017)	H30 (2018)	R1 (2019)	R2 (2020)
5月	1878	1743	1575	1452	1375	1417	1524	1621
不活動生5月	309	290	288	222	200	182	182	153
不活動生の割合	16.5	16.6	18.3	15.3	14.5	12.8	11.9	9.4
除籍者数	261	250	234	170	159	148	152	123
除籍者の割合%	13.9	14.3	14.9	11.7	11.6	10.4	10.0	7.6

(2) その背景

この数年間、生徒の学習に対する意識は確実に変化したように感じる。本校ではレポートの提出期限は各レポートの提出期限の後に「最終提出期限」を設けて、それを過ぎた場合は受け付けない（不合格）としているが、以前はこの「最終提出期限」ぎりぎりに提出されるレポートがとて多かった。ところが、この数年、各レポートの提出期限までに提出されることが多くなっている。計画的にレポート学習にとりくんでいる生徒が増えている。こうした学習に対する意識の変化が単位修得率と大きく関係していると思われる。

こうした生徒の変化や単位修得率上昇の最大の理由は、まず、各担任の一人ひとりの生徒へのきめ細かなかわりであろう。先にも述べたが、個々に配慮した適切にとりくみが、生徒の学習に対する意識を高めることにつながっている。レポート添削でも、教科担任の一言が励みとなったという生徒の声も多く聞かれる。また、教育相談係が生徒・保護者の思いに寄り添うとりくみを進めてきたことも大きい。全職員が、生徒・保護者の思いに寄り添いながら地道に進めてきた、こうしたとりくみが、近年生徒の気持ちの変化につながり、単位修得率の上昇や除籍者数の割合の低下につながっていることは確かである。そのなかで教務係としてとりくんできたこと、とりわけベーシックスタディ教室や入学前の学校説明（個別相談）が、全職員の生徒へのかかわりに少しでもつながっていたのであれば幸いである。そして、何より生徒が学習することに喜びを抱き、開陽通信に入学して良かったと思い、誇りを持って卒業していってくればありがたい。

6 課題と今後の展望

(1) 不活動生へのかかわり

この数年確かに不活動生は減少し、除籍者数も減っている。しかし、依然として約1割の生徒が不活動生であり、その多くは学則により除籍されていく。不活動生に対しては年2回学習再開の案内をしているが、「再開希望」の届けをしなかった生徒はそのまま除籍となる。したがって、今後、不活動生へのかかわりをもっと工夫し、除籍者数をさらに減らすとりくみを進めていきたい。

(2) 卒業後の生活保障へどのようにつなげるか

単位修得率の上昇に見られるように、生徒の学習へのとりくみは向上している。しかしながら、発達障がいや特別支援を必要とする生徒が卒業を迎えるとき、その先を考えると、少なからず不安な気持ちになる。必ずしも安心して送り出せるような社会環境にはなっていない。就労支援関連のNPO法人をはじめ関係機関と連携し、彼らが卒業後も安心して生活できる環境をつくるとりくみを進めなければならない。

(3) 地区協力校の生徒へのかかわりをより深くするために

先に述べたように、本校は県内に14の協力校があり、約4割の生徒が学んでいる。本校職員が地区協力校に行く機会は少なく、直接会うことはほとんどない。したがって、地区の生徒の様子があまりわからないというのが現状である。そこで、地区生徒の基礎学力の向上やレポート学習のサポートのために、現在本校のみで実施している「ベーシックスタディ教室」を地区ごとにとりくめないか検討していきたい。このことは本校職員が地区の生徒とかかわる機会を少しでも増やすことにもなる。

(4) 入学前相談（学校説明会）の意義を理解し、さらに充実させるために

今までも述べてきたように、通信制への問合せの中で、中学校（小学校）からの不登校によって学習に不安を感じている子どもや、「発達障がい」「精神疾患」等を抱えた子どもの保護者が、高校は卒業してほしいと切実に願っている思いが伝わってくる。全日制の高校に入学したけれども、学習や人間関係に悩んで学校に行けなくなり、開陽通信制への転学を希望して相談に来るケースも多い。子どもが不登校となった経緯や「発達障がい」等をはじめ、家庭のこと、経済的なこと、自分自身の生き立ち、等、様々な事が話題になる。単なる学校説明だけではなく、教育相談のような内容になる。なかには、高卒認定試験についての問合せもある。願書の取寄方法や、何を受験すればいいかなどの相談を受ける。

一方、「ひきこもり」や「精神疾患」等で高校進学を諦めたり、高校を中途退学したりした人の中には、「高校に進学したい」とか「学び直したい」とか思いながらも相談できずに悩んでいる人も少なからずいるのではないかと。そうした人たちが気軽に相談できるような機会をつくるのがますます重要になってくると思われる。

開陽高校は全日制・定時制・通信制の3課程を併設する県内唯一の単位制公立高校であり、多様な生徒が学び方を選択できる特色ある高校である。なかでも通信制課程は様々な悩みを抱える生徒や保護者が一縷の望みを抱いて相談に訪れる場所である。その通信制に「入学相談係」を新しく設置したことは大きな意義がある。この「入学相談係」を、学びたいと思いながらも諦めている生徒や保護者が、より気軽に相談できる環境づくりの中心的存在として位置づけ、充実させていきたい。さらに、全日制・定時制と協力して、開陽高校に「学びの相談室」なる機関を作ることも検討して良いのではないかと。

7 まとめ

様々な課題や困難を抱えた生徒およびその保護者とより深くかかわるためのとりくみを始めて数年経過した。生徒が少しでも安心して本校に入学してもらうために、学校説明（個別相談）を通して、入学前から少しでもかかわることができる機会も増やした。面談の内容を、必要に応じて入学後の新しい担任に引き継いだりした。担任や各係がそれぞれの立場で、「高校で学びたい。卒業したい。」「高校は卒業して欲しい」と願う生徒・保護者の思いに寄り添いながら、深くかかわってきた。この間、各教科科目の単位修得率の上昇や不活動生（Dグループ）の割合の減少、除籍者数の減少など、その成果も少しずつ現れてきている。これからもこうしたとりくみをさらに充実させ、1人でも多くの生徒が本校を卒業して、新たな歩みが始められるように、全職員で協力し、とりくんでいきたい。